

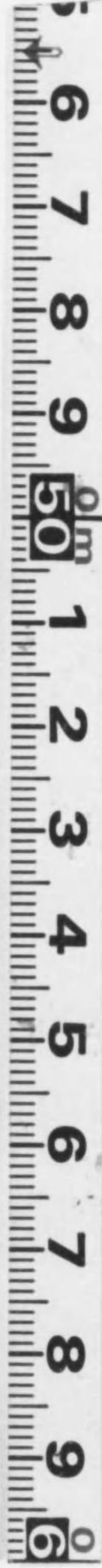
特257

223

菅原時保禪師

碧巖錄講演

(其二十八)



始



特257
223



臨濟宗
建長寺派
管長

菅原時保禪師

碧

巖

錄

講

演

(其二十八)



碧巖錄講演其二十八目次

第八十一則 藥山塵中塵……………一頁
 第八十二則 大龍堅固法身……………一九頁
 第八十三則 雲門古佛露柱……………三四頁
 第八十四則 維摩不二法門……………四八頁

碧巖錄提講

第八十一則 藥山塵中塵

◎垂示

垂示云、攙旗奪鼓、千聖莫窮、坐斷謗訛、萬機不到、不是神通妙用、亦非本體如然、且道憑箇什麼、得恁麼奇特、

讀方

垂示に云く、旗を攙き鼓を奪はば、千聖も窮むること莫からん。謗訛を坐斷すれば、萬機も到らざらん。是れ神通妙用にあらずや。亦本體如然に非ずや。且く道へ、箇の什麼に憑つ

てか、恁麼に奇特なることを得るぞ。」

字解、分解。

『機旗奪鼓、』是は四十九則の處で一應申し述べた様に記憶して居ります。故に重説を略すべきが本當である。されど今日始めて御出席の方々の爲に簡短に述べて見ませう。』師家が學人を接得する、其の機鋒の嶮峻なることを戦争に喩へ、敵が旗鼓堂々と征め來つた、其の旗鼓を何の苦もなく我が手に入れる様子を斯く云うたのである。』此の嶮峻にして且つ敏活、所謂間に髪を入れざる老作家に逢うては、千聖無窮で、三世三千の諸佛と雖も軍氣沮喪、——法戦を持続することは出來ぬ。——

坐斷、誦訛、——坐斷は挫折の意、——誦訛は不合理又は複雑。

——萬機不到、——師家の敏腕にかゝつては如何なる破衲子と雖も手も足も出すことも動かすことも出來ぬ。それは神通妙用か。否、然らず、本體如然である。されど聊か奇特の感なき能はず。畢竟奇特とは如何なることか。——本則に參ずべし。

提講。

例の圓悟禪師が座下の門人に向つての垂示。——我に法窟の爪牙と奪命の神符があれば、如何なる大敵が襲ひ來ると雖も、軍旗をひつたくり陣太鼓を奪ひとる位のこととは、敢へて神通妙用を働かすには及ばぬ。本體如然で平生底の茶飯事である。何

四
が故に然るや。知るべし、誦訛を坐斷するからである。多くの人は迷信、臆説、誤謬、それらに顛倒さる。然るに苟も正師家と云はるゝ人は然らず。かゝる明眼の正師家が面前に出頭し來れば、如何なる人と雖も萬機不到、氣を呑み聲を飲むより外に手段はない。——之是を奇特の事と云へば、奇特の事と云ふも敢へて妨げはない。』本體如然か神通妙用か、それを知らんと要せば先づ以て左の本則に親しく參じ來れ。

◎本則

舉、僧問藥山、平田淺草、麈鹿成群、如何射得塵中麈、山云、看箭、僧放身便倒、山云、侍者拖出這死漢、僧便去、

山云、弄泥團漢、有什麼限、雪竇拈曰、三步雖活、五步須死、

讀方

舉す。僧、藥山に問ふ、「平田の淺草に、麈鹿群を成せり。如何にしてか、塵中の塵を射得せん。」山云く、「箭を看よ。」僧、身を放つて便ち倒れたり。山云く、「侍者這の死漢を拖出せ。」僧、便ち去れり。山云く、「泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん。」雪竇拈じて云く、「三步に活すと雖も五歩には須く死すべし。」

字解、分解。

六

本則の主人公は藥山惟儼禪師、石頭禪師の法嗣にして達磨大師九世の嫡傳者、絳州韓氏の子、十七歳にして潮州西山の慧照禪師によつて出家すとある。——又衡岳の希操律師を拜し、具戒して以來戒律を持し、博く經論を修められた。或日自ら深く省みる所あり、曰く、「大丈夫、當に法を離れて清淨なるべし。何ぞ屑々として細行を事とせむ。」と、從來の法に頼る思想を一擲し、湖南の石頭希遷禪師を訪ひ、「三乘十二分教は某甲略之を知れり。曾て聞く、南方に直指人心、見性成佛を云ふあり。實に未だ明了ならず。伏して望むらくは、禪師、慈悲を以て指

示せよ。」と。石頭禪師、老婆の臭口を開いて、「恁麼も也得ず、不恁麼も也得ず。恁麼不恁麼、汝、作麼生。」と云はれたが、藥山には何のことかトンとわからぬ。只茫然たるのみ。是を見て石頭、「汝の縁はこゝにあらず。馬大師の所へ往き去れ。」と老婆されたので、其の指命に従ひ、江西の馬祖道一禪師を訪問し、前と同じ質問。馬祖、「我、或時は伊をして揚眉瞬目せしめ、或時は伊をして揚眉瞬目せしめず。或時は揚眉瞬目するも是、或時は揚眉瞬目せざるも是。汝、作麼生。」と石頭と同じ様なことを云はれた。されど藥山は既に石頭の處に於て多少の疑團を抱いたが爲に、言下に一道の曙光を得たものと見え、直に禮拜せ

七

り。馬祖、「汝、甚麼の道理を見て便ち禮拜する。」と問はるゝと、藥山、「某甲、石頭の處に於て蚊子の鐵牛に上るが如くに相似たり。」と答へた。馬祖云く、「汝既に是の如し。よく護持せよ。然りと雖も汝が師は石頭なり。」と。此の外、種々の逸事があるが今は略します。——平田淺草、「天臺山の近傍に平田と云ふ處があると云ふ人があるが、今は必ずしも天臺山のそれに依る必用はない。草の繁茂して居る平野でよろしい。——塵中塵、」是は鹿の中の大将。所謂借事問。是に依つて師家の手元を點檢するのであるから、驗主問とも又は辨主問とも云ふ。——看箭、「ソラ箭だ。」箭をツキツケた。——放身、「射殺

された様子、バタツと倒れた。——弄泥團漢、「是は唐宋時代の俗語で、日本の俗語の土百姓とか芋堀坊主とかにあたる、と井上君が教へてくれた。如何にも然りであります。——三歩、五歩、」是も井上君の説に依ると唐宋時代の俗語。日本の俗語に、見てをるがいゝ、直にくたばつてしまふ、と云ふに相當する、とあります。衲も同意であります。

提講。

禪僧あり。一日、藥山禪師の禪關をたゞき、親しく藥山禪師に拜顔し、問うて曰く、「拙僧今日貴山へ參上する途中、茫々たる平田の草原に澤山の鹿が三々五々群をなし隊をなし、臥すも

あり走るもあり、又草を喫するもあり水を呑むもあり、それは
 〳〵實に驚く有様でありました。何れ其の協同生活をして居り
 ます鹿の中には鹿中の王たる塵が居りませう。其の又塵中の塵
 とも云ふべき大塵は如何にして射殺したものでありませう。」
 と暗に拙僧こそ禪僧中の禪僧、云ひ換へれば塵中の塵である、
 此の拔群越格の那一僧を禪師如何に接得なさるか、と頭を擎げ
 角を怒らして出で來りし。其の氣宇、乾坤を吞盡する勢。
 是に對してサスガ藥山禪師だ。神通妙用を弄せず、本體如然底。
 「ソ。ラ。箭。が。飛。ぶ。ぞ。」——是を就身打劫と云ふ。藥山禪師であ
 ればこそ。尋常一様の師家ならば、既に業に問僧に吞却せらる

ゝであらう。——此の僧、驚くかと思ひの外、多少修養が出來
 て居るものと見え、禪師のお手元を見るや、如何にも箭が明中
 したかの如くバツと倒れた。圓悟禪師は弄精魂漢と下語され
 たが、見事に一箭、紅心に中れりだ。『藥山禪師、僧の倒るゝを
 見て、「オイ侍者來い來い。此の死人をかたづけしてくれ。」可謂、
 前箭は軽く後箭は深しと。先の、そら箭が飛ぶぞ、それも毒箭
 であるが、それよりも侍者拖出這死漢、これが一層毒箭である。
 僧便走、禪師の毒箭に中つては如何なる九尾の野狐と雖も尻尾
 を出さずにはをられぬ。圓悟禪師、此野狐僧を弄して、死中に
 活を得たり、と下語された。如何にも的中。——藥山禪師、

引導して云く、「泥團を弄する漢、什麼の限りかあらん。來るや
つもく芋堀坊主。よくもく揃うたものだ。」と長嘆息。

如何にしたら藥山禪師をして首肯せしむることが出来る。試みに云へ、持ち來れ。』——雪竇禪師は藥山禪師に代り、三步雖活、五步須死、と。圓悟禪師は、直饒走ること百步なるも、也須く喪身失命すべし、と。衲は云ふ、雪上に霜を加ふ、と。更に閑言語を下せば、欄干雖共倚、山色看不同、——一等共行山下路、眼頭各自見風煙。』

◎頌

塵中塵、君看取、下一箭、走三步、五步若活、成群趁虎、

正眼從來付獵人、雪竇高聲云、看箭、

讀方

塵中の塵、君看取して一箭を下せり。走ること三步、五步にして若し活したりしならば、群を成して虎を趁ひしならん。

正眼は從來獵人に付す。』雪竇、高聲に云く、箭を看よ。』字解、分解。

君看取の君は雪竇禪師が藥山禪師を指したのである。

正眼從來云々、』是は藥山禪師の看箭と云ふ處から、雪竇禪師が藥山禪師を獵人に擬したるもの。

提講。

我こそは塵中の塵なりと自稱して來た其の僧を一箭の下に射殺した、其の様子を、君看取して一箭を下せり、と頌じたのである。

(此の塵中の塵を、主中の主、法王中の法王、又は法身佛、眞如法性、本來の面目、などに比擬する人もある。敢へて妨げなしと雖も、塵中の塵は塵中の塵でよろしい。好んで横道に入る必用はない。故に衲は多端に渡らず塵中の塵としておきます。)

如何に問僧が、頭を撃げ角を怒らして出て來ても、僞物はどこ

までも僞物。藥山禪師に一見辨見、五臟六腑まで見抜かれた。

ヤイ此の野狐め、そら箭だ。——看箭。——一箭を下され

た。——箭を放たれた。藥山禪師は弓術の大家、故に百發百中。無駄箭は一本もない。』無駄箭はない、と云ふことに就いて、碧巖録中に左の如き一話が挿んである。

「豈不見、三平初參石鞏、鞏才見來、便作彎弓勢云、看箭、三平撥開胸云、此是殺人箭、活人箭、鞏彈弓弦三下、三平便禮拜、鞏云、三十年、一張弓、兩隻箭、今日只射得半箇聖人、便拗折弓箭、』とあります。

序ついでに右の一話を簡短に老婆して見ませう。

三平、其の名は義忠と云ふ。後に大顛寶通禪師に嗣法す。石鞏、其の名は慧藏と云ふ。馬祖道一禪師の嗣法者。——或日のこと三平が石鞏の處へ參上すると、石鞏は才かに其の來るを見て、弓を引く勢をなし、箭を看よ。——すると三平もさるもの、即時自己の胸を開き、「殺人箭か、活人箭か。——人を殺す箭か、人を活かす箭か。」——石鞏も石鞏、豈敢へて三平如き者に一步譲らんや。石鞏たゞちに弓の弦を三度彈かれた。(是は何の事ぞ。)三平、早くも其の機を見て、禮拜す。茲に於て、石鞏、三十年一張の弓。兩隻の箭、今日只半箇の聖人を射得むたり、と云うて其の弓箭を折つてしまはれた、とある。——

蓋し此の則の藥山禪師と難兄難弟である。『閑話は休題。問僧は藥山禪師の箭に中つて倒れた。倒れたまゝで居れば野狐ではない。或は塵中の塵であつたかも知れぬ。問僧が倒れたから、藥山禪師、「オイ／＼侍者々々、葬式の支度だ支度だ。問僧が死去したぞ。」——此の聲を聽き、ソラ死をした問僧、火葬場へ擔ぎ去られては一大事と想つて、ムク／＼と起き上つて走りだした。そこを雪竇禪師、走ること三步、と吟じ、若し幸にして五歩以上走ることが出来たならば、所謂死中に活を得るで、震天動地の大神通を顯はし、群鹿を引率して虎を追撃することが出来たであらう。——それが出来なかつたのは如何にも残念

々々。——「眞偽を辨見するも、死活を知得するも、總に是れ正法眼を具する薬山禪師の獵人に一任する外はない。」と雪竇禪師は薬山禪師を托上された。——薬山禪師こそ迷惑千萬である。——此の場合、薬山禪師でなくとも斯くあるは理の當然なり、と云はんばかりに、雪竇禪師、頌じ終つて、會下の大衆に向つて高聲して曰く、「看箭、——それ箭だぞ。」——恁歴は畢竟するに薬山の事にあらず。圓悟の事にあらず。雪竇の事にあらず。又問僧の事に非ず。蓋し人々箇々の事である。——看箭。」

(昭和十五年四月六日講演)

第八十二則 大龍堅固法身

◎垂示

垂示云、竿頭絲線、具眼方知、格外之機、作家方辨、且道、作麼生是竿頭絲線、格外之機、試舉看、

讀方

垂示に云く、竿頭の絲線は、具眼方に知る。格外の機は、作家方に辨ず。且く道へ、作麼生か是れ竿頭の絲線、格外の機なるぞ。試みに舉す看よ。」

字解、分解。

竿頭絲線、これは魚を釣る人は能く知つてをる。釣竿のさきに餌をつけ水の中へ垂れて魚をとる様子。——師家が學者を試験するに、斯くの如き手段あることを云ふ。——具眼方知、云ふまでもない、智恵のある魚は餌を頂戴して上手に逃げる。馬鹿の魚は餌を頂戴しないうちに釣り上げらるゝ。——格外之機、——因襲や杓子定木にとらはれず臨機應變の活作略をなすこと。師家の應病與藥底を指す。又學者にも通ず。——

提講。

或時、圓悟禪師、大衆に向つて垂示なされた。師家たる者が

學者の修行底を試験せんが爲に、喝を吐いたり棒を揮つたり、又は古人の言語文句を拈唱しても、學者その人に心眼が開いて居れば、決して方便手管にはのらぬ、却つて師家を呆然たらしむることがある。師家のみに格外の機があつて、學者に方に辨ずる活眼がなければ、師家も學者も共に無駄であり、共倒れである。』昔は知らず、今日は師家も學者も盲人と盲人との闘争。——傍人、是を見て笑ふのみか氣の毒に思ふ。』心ある師家、氣概ある學者、傍人に笑はれぬやう、氣の毒と思はれぬやうに勤勉努力せざる可からず。』竿頭絲線、格外之機、是らの活用振り本則を活讀して知るべし。』

◎本則

舉、僧問大龍、色身敗壞、如何是堅固法身、龍曰、山花開似錦、澗水湛如藍、

讀方

舉す。僧、大龍に問ふ、「色身は敗壞す。如何なるか、是れ堅固法身。」龍曰く、「山花は開いて錦に似たり。澗水は湛えて藍の如し。」

字解、分解。

大龍、』是は鼎州大龍山の智洪禪師のことである。嗣法は達磨大師から十四代目に當る。師匠は白兆志圓禪師。傳記は少しも

傳はつて居りません、と云ふことである。』思ふに理想的詩人生活を送られた人らしい。或僧が如何なるか是れ微妙、と問はれた。それに答へて曰く、風送水聲來枕畔、月移山影到牀邊、とあります。此の則にある山花云々も、風送水聲云々と蓋し異曲同工。

色身、法身、色身は我等の肉體、——法身は我等の靈魂。是は普通一般の説。——元來、肉體を離れて靈魂なし。靈魂を外にして肉體なし。肉體と靈魂は不二同體。そこに於て始めて肉體の働きもあり、靈魂の働きもある。されど理に通ぜず道に明かならざる人は強ひて、肉體は肉體、靈魂は靈魂、と別々に

して自ら迷ひ自ら苦しむ。氣の毒の事である。——
 堅固法身、堅固は不滅の意。法身は靈魂でも精神でもよろしい。佛教學の方から云へば種々様々の説があるが、今は一切略す。

山花云々は別に説明する必用はない。所謂、讀んで字の如くである。

提講。

茲に一僧あり、心境一如、物我不二の道理に透通せざる立場から、「佛敎では我等の身體を靈と肉との二方面から見て、此の肉體の色身は死滅するが靈魂の法身は破壊せず、と云ふやうで

あるが、果して然らば色身敗壞の後、破壊せざる堅固法身は如何なるものであるか。」と大龍山の智洪禪師に質問を呈した。之是は問僧の放出した竿頭の絲線である。或人は、「問僧は具眼者か不具眼者か。」と、此の問僧に對して一疑を抱いてをる。が衲に云はすれば無論不具眼者である。何が故に。色身の外に法身がある、と思つて居る處が不具眼者の確證である。『現今此の問僧に似たる人は決して少數ではない、極めて多い。衲の如きも曾て此の問僧と同類であつた。——聞かずや色即是空、空即是色と云ふことを。——知らずや眞空妙有、妙有眞空と云ふことを。——敢へて説明せずとも一切の事々物々が事實に顯

露して居る。」——藥山禪師は具眼者にして且つ格外の機を運出さるゝ人である。故に問僧の絲線、何れの處にあるかは一見辨見。開口して曰く、山花開似錦、澗水湛如藍、と。——云ひ得て妙、——語り得て玄。——此の句に對して四の五の言端を下せば山花も其の錦を失ひ、澗水も其の藍をなくするぞ。』

或人が、「大龍禪師の問僧に答へた山花云々は色身敗壞を云うたのか、堅固法身を云うたのか。」と學者に向つての提唱。——天桂禪師は、「是れ法身か、是れ色身か、但し壞か不壞か、是れ何の境界ぞ。目あらば見よ。佛法玄妙の道理なき平常の活句、

法身透過の那一句、徧界曾て藏さず。」と。要するに何れも閑葛藤。——學者、心外に法を求めず、自己の脚下に目を着けて見よ。色身も法身も共に明々白々になる。——若し疑ふ人あらば來り參ぜよ。——

◎頌

問曾不知、答還不會、月冷風高、古巖寒檜、堪笑路逢達道人、不將語默對、手把白玉鞭、驪珠盡擊碎、不擊碎增瑕類、國有憲章、三千條罪、』

讀方

問も曾て知らず、答も還た會せず。月は冷かに風は高し、古

巖寒檜いんかんぐいに。笑ふに堪へたり、路に達道の人に逢はば、語黙を將つて對ふるなかれ。手に白玉の鞭を把つて、驪珠りじゆを盡く撃碎す。撃碎せざりしならんには、瑕類かゐを増し、ならん。國に憲章あり三千條の罪。』

字解、分解。

問曾不知、』問僧の胸中を忖度して、問曾不知と云うたのである。不知とは如何に。云く、他なし。色身の何ものたる、法身の何ものたる、それを知らざるがために斯く問うたのである。故に圓悟禪師、下語して、東西不辨、と云うて居らるゝ。』
答還不會、』此の不會は不知と云ふ意味でなく、知不知を超越

したる所謂本分の不會。故に圓悟禪師云く、「南北不分。」
又云く、「換却罽毘」と。大龍禪師の胸中を掬し得たりと云ふべし。』
月冷、古巖、』是は雪竇禪師の堅固法身底。大龍禪師の山花云々に對しての句。——堪笑、』堪笑同時灌溪老、解云、劈箭亦徒勞、と曾て吟じられた、それと同曲。——路逢、達道人云々、』香嚴智閑禪師の句。其の意味は、「若し路上に於て達道の人に會うた場合は、言語を用ひるも不可、用ひざるも不可。語と黙とを超越した一句を提唱せざるべからず。」と云ふのである。——白玉鞭、』是は大龍禪師の山花云々の句を指したるもの。——驪珠、』驪龍下の珠。蓋し驪龍の大切に

てをる明玉のことならん。』驪龍が大切にして居る如く問僧の大切にして居る堅固法身を、山花云々の白玉の鞭を以て盡く撃碎された。それが驪珠盡撃碎である。——『瑕類』『瑕は珠玉のきず。類は絲のむら。——三千條罪、』是は國家の法律。罪を犯した者は免るゝことは出来ぬ。委細を知らんと欲せば書經を見るべし。

提講。

色身敗壞も堅固法身も文字や言語の上では何とでも云ひもし語る事も出来るが、實際の點に至つては、或は口に大悟徹底したと云ふ人も頗る不得要領である。況んや問僧の如きは小悟も

せずして斯かる問端を發するは可謂、問會不知である。(知らざるが故に問ふ、と云へばそれまで。)不知の間に對して大龍禪師の山花云々を、還不會、と頌じられた雪竇禪師の意は文字そのまゝの不會ではない。不知、不會を脱出したる眞箇の大不會である。』故に雪竇禪師は大龍禪師の不會底に共鳴し、月冷風高、古巖寒檜、と大龍の春意に對して秋情を報いられたは、雪竇禪師の用意周到なる處である。』此の頌を拜讀する人、心せざるべからず。——更に大龍禪師、不會底の答句に對し賛賞措く能はず。故に曰く、堪笑路逢達道人、不將語默對、と香巖禪師以上に托上せられた。』香巖禪師の如きは、語默を以て對せざれ、

と規定されたが、大龍禪師は語黙を以て對することもあり、對せざることもあり、で其の自由、其の自在、可仰可敬。——堪。笑の此の二字に着目すべし。手把白玉鞭より以下增瑕類までの句は大龍禪師の問僧に對する活作略を賞讃されたのである。問僧が堅固法身を大切に思ふことは猶驪龍が領下の玉を大切ににする以上である。それを無遠慮に大慈の白玉鞭、山花開云々を以て擊碎なされた。——擊碎なされたから、或は問僧も多少得る處があつたであらう。又後世此の僧に似たる無眼子の輩をして曙光を見せしむるの一助となりたることは確實である。「然るに萬が一、大龍禪師が人情にほだされ白玉の鞭を拈出せ

ず、徒らに第二義門に下り場當りの老婆談をなされたら、それこそ取りかへしのつかぬ大失敗。無論、三千條の憲章、その中の箇條によつて罰せられたであらうに。」とは雪竇禪師の白玉鞭である。——衲が如き凡僧が本則に對し彼れ是れと妄談を弄せし其の罪、無論三千條の何れにか觸るゝであらう。罰せられざる間に下座して謝罪致しませう。之を色身と云ふか、堅固法身と云ふか。請ふ諸君、辨別し來れ。

(昭和十五年四月二十日講演)

第八十三則 雲門古佛露柱

垂示は欠缺。本則そのものが垂示兼本則。可謂、一種の變體式と。

◎本則

舉、雲門示衆云、古佛與露柱相交、是第幾機、自代云、南山起雲、北山下雨、

讀方

舉す。雲門、示衆して云く、「古佛と露柱と相交はる、これ第幾機ぞ。」自ら代つて云く、「南山に雲を起し、北山に雨を下

す。」

字解、分解。

雲門文偃禪師は前に屢々出てをります。故に重説は無用であるが、垂示のなきを幸に一言申し添へておきます。雲門禪師は實に拔群越格の大宗師家、機鋒の峻峭、活略の明敏、——千古無比、——九十餘人の善知識を打ち出されたことを以て知るべし。』聞く、禪師埋葬の後十七年を経て、節度使の阮紹莊と云ふ人が靈夢を感じ、天子に奏して勅許を得、雲門禪師の墓を開き見るに、容顔生けるが如く儼然たりし故、其の遺骸を宮中に奉安し禮拜供養すること一ヶ月以上、大慈雲匡眞弘明禪師と

云ふ謚號を賜うて元の墓所に再葬された、と。火葬した遺骨であれば他に其の例なきに非ず。埋めた肉體のまゝの遺骸にして宮中で天子の供養を受けられた人は、雲門禪師の外に未だ曾て一人もあることなし。此の一事を以て、世界に比類稀なる大善知識と云ふことが云へる。——示衆、「垂示と同意義。——多少の異説はあるが、大同小異。——古佛、』是は寺にある佛像のこと。古佛の文字に捉はれて、必ず三世の諸佛、歴代の諸祖とするに及ばず。——露柱、』或人は壁の中に塗りこんである柱のことと云はるゝが、寺の本堂にある面前の柱で敢へて妨げなし。』——相交、』交際、親交、握手等の意である。——

是、第幾機、』機は機用、機根、機略等、いろ／＼に使用されます。要するに心の働きを意味したるもの。幾機とは、心の働きのどの部類にあたるや、である。心の働きに就き大内君の廣長舌があるが、今は略します。——南山、北山、』必ずしも南山、北山に限りません。雲も雨も必ずしも雲や雨に限りません。宇宙間にある現象を一時借用して云うたのである。

提講。

雲門禪師、一日、自己の藥籠から華嚴哲學の眞理を禪的に應用し、大衆に示して曰く、「古佛、蓮臺にあるあの佛と、露柱、鴨居を拄へて居るあの柱と如何なる消息を通じて居るか。此の

道理を自知して居る者は手を挙げよ。」と大獅子吼なされた。雲門禪師の心意は何れの處にあるか、衲等の忖度し得る限りではない。されど代語の、南山に雲を起し北山に雨を下す、と云ふ語端から觀察すれば多少の忖度は出来る。聞く、帝綱重々主伴無盡、と。之是の意は華嚴經の事々無礙法界を譬喩したものでならん。』知るべし、宇宙は帝綱重々主伴無盡、忘るゝ勿れ、天地は事々無礙法界。』古人云く、「萬法は一に歸す、一は萬法に歸す。」一の外に萬法なし、萬法の外に一なし。然れば一と萬法と常に恒に相交つてを。又云く、「大に大きく、小に小なし。極小は大に同じ、極大は小に同じ。」然れば大と小と常に恒に相交

つてゐる。』道理からは事々無礙と云ひ、譬喩からは帝綱重々と云ふ。要するに、古佛と露柱と相交はる消息も蓋し恁麼の道理である。果して然るや否やは親しく雲門禪師に聽かざれば分明なる能はず。——それはそれとして、衲は思ふ。苟も雲門禪師の座下にある大衆、衲が右に陳述した如き普通一般のことを知らざる道理なし。然るに一人として確答せざる所を見れば、言或は外に深き仔細があるならん。必ずありと思うてのことなふん。由來、正法に不思議なし。看よ、雲門禪師衆に代つて、南山起雲、北山下雨と云はれしを。昔も然り、今も然り。東洋も然り、西洋も然り。お互が見つゝ知りつゝある。然るに古佛と

露柱と相交ること第幾機ぞ、と言句を代へ文字を代へて鼻先へ突きつけらるゝと、一言半句も應答の出来ざるは抑々如何なる缺點に依る。云く、他なし、心外に法を求むるが爲なり。——畢竟、宇宙の妙體も、天地の玄用も、各自の心を離れて眞箇の交をなし得る能はず、と知るべし。敢へて第幾機を心頭にかくる必用なし。隨處に主となれ、隨所に主となれ。嗚呼、ノドが乾いた。お茶一杯頂戴。——

◎頌

南山雲、北山雨、四七二三面相觀、新羅國裏曾上堂、大唐國裏未打鼓、苦中樂、樂中苦、誰道黃金如糞土、」

讀方

南山には雲、北山には雨。四七二三面のあたり相觀たり。新羅國裏に曾て上堂。大唐國裏に未だ鼓を打たざるに、苦中に樂あり、樂中に苦あり。誰か道ひしぞ黄金は糞土の如しと。」字解、分解。

南山雲、北山雨、」是れは雲門禪師の古佛と露柱の相交底。それをそのまま、自己藥籠に入れて吟出なされたは雪竇禪師の慣手。敢へて賞讚するほどのことはない。禪家尋常の茶飯である。』されど雲門禪師の南山雲、北山雨は雲門禪師の南山雲、北山雨。雪竇禪師の南山雲、北山雨は雪竇禪師の南山雲、北山雨。

決して同一にあらず。同一にあらずと雖も全然別物ではない。尋常一様窓前月、纔有梅花便不同、「雲門禪師の南山雲、北山雨は雲門禪師にあざれば其の妙處を知る能はず。雪竇禪師の南山雲、北山雨は雪竇禪師にあざれば其の玄妙を知る能はず。畢竟如何、南山雲、北山雨。」

四七、二三、「西天の四七、東土の二三。釋迦如來の上足迦葉尊者より六祖大師までを云ふ。面相觀、」苟も佛祖と云はるゝ人は、何れも南山雲、北山雨を如實に見、如實に知る。敢へて佛祖に限らず、お互も南山雲、北山雨は見もし聞きもし、千萬承知してをる。が果して雲門禪師その如く、雪竇禪師その如く

くでありしや否は大なる疑問。」——新羅國、裏大唐國裏、「是は、古佛と露柱と相交はる底を頌出したもの。石女舞成長壽曲、木人唱起太平歌、でも不合理ではない。「特に新羅云々と云はれたのは座下の禪僧中に新羅の禪僧が混居してありしがためだ。」と或人は云うて居らるゝ。——苦中樂、樂中苦、」云ふまでもなし、相交底を云ふ。誰道黃金云々、「是は禪月和尚の詩に、誰道黃金如糞土、とある、それを雪竇禪師が借用して相交底を巧みに文字禪に顯はされたのである。其の故事は張耳と陳餘の話。此の二人は共に大梁の人、最初は誠に親しき友として交りました。其の親しさを物に喩へて云はば黄金以上。交りの親厚

から見れば黄金も糞土の如しと云ふべし。處が、後には互に權力の争を起し、是が爲に相排斥し、黄金の交りが糞土より一層汚らはしくなりしと。——要は古佛と露柱の交りは朝變暮改、昨是今非の如き輕薄のものにあらず、最初より無念を念とし無相を相としての親交であるから、千秋萬古、不變不磨である、と云ふに歸するのである。』

提講。

南山に雲が起れば、北山に雨が降る。所謂、雲行き雨を施す。必ずしも南山、北山には限らぬ。西山でも東山でも、西洋でも東洋でも、方角や場處に制規はない。何れにせよ雲行き雨を施

すは天地自然の法則で、神の威力でもなければ佛の慈悲でもない。是等の道理は普通一般の人ですら既に承知して居る。況んや四七二三の佛祖に於てをや。昔の昔の其の昔にチャンと悟了していらつしやる。』南山雲、北山雨を一轉して、新羅國裏曾上堂、大唐國裏未打鼓と云ひ、更に轉じて苦中樂、樂中苦と頌じ、最後に誰道黄金如糞土と結ばれたは、雪竇禪師の道力であり禪機である。——古人は苦中樂、樂中苦、それに就き落草して曰く、「苦中の樂なるが故に樂にあらず。樂中の苦なるが故に苦にあらず。煩腦即菩提、菩提即煩腦。悟中に迷があるでも、迷中に悟があるでもない。苦も樂も没蹤跡、斷消息。二つながら

洒々落々。」とあるが、是では初學者には何のことか更に要領を得る能はず。故に衲は云ふ、雨が降つたら降つた時のやうに、晴天であつたら晴天のやうに、苦の時は苦、樂の時は樂、寒は寒、暑は暑、それでよろしい。敢へて黄金を糞土にし、糞土を黄金にするには及ばぬ。黄金は黄金のまゝ、糞土は糞土のまゝ。

斯く云はば或人は云ふならん。それなら今日お互が知りつゝ行ひつゝある通りではないか、と。無論、禪はお互が知りつゝ行ひつゝある通りの外に更に一物もなければ不思議もない。禪の禪たる所以は心境一如、物我不二。立つときは天地と共に立ち、坐すときは大地と共に坐し、笑ふときは天地と共に

笑ひ、泣くときは天地と共に泣く。共に俱に。着目すべし。「幸に共に俱になり得るならば、雲がどうの雨がどうの、苦だの樂だの、黄金糞土云々は總に是れ日下の燈。あれば寧ろ邪魔。畢竟如何。行到水窮處、坐看雲起時。」

(昭和十五年五月二十五日講演)

第八十四則 維摩不二法門

◎垂示

垂示云、道是、是無可_レ是、言非、非無可_レ非、是非已去、得失兩忘、淨裸々赤灑々、且道面前背後是箇什麼、或有箇衲僧出來道、面前是佛殿三門、背後是寢堂方丈、且道此人還具眼也無、若辨得此人許_レ衲親見_レ古人來、』

讀方

垂示に云く、是と道ふも、是の是とす可_レき無く、非と言ふも、非の非とす可_レき無し。是非已に去り、得失兩ながら忘_レずれば、

淨裸々、赤灑々ならん。且く道へ、面前背後は、是れこれ什麼。或はこゝに衲僧の出で來つて、面前には是れ佛殿三門あり、背後には是れ寢堂方丈ありと道ふことあらば、且く道はん、此の人還た眼を具するや無やと。若し此の人を辨得せんと要せば、衲の親しく古人を見來らんことを許さん。』

字解、分解。(衲僧は文殊、古人は維摩。)

是、』有神論と云うてもよし。非、』無神論と云うてもよし。

又は善惡邪正、迷悟苦樂、と云うても敢へて妨げなし。一切放下(否定)するを、己に去り、兩ながら忘_レずと云ふ。淨裸々、赤灑々、』一切を放下したる結果。云ひ換へれば、都ての兩々雙

々は元來實相なし、と大觀したる境界。——佛殿、「禪寺の本堂。三門、」禪寺の表門。三門は山門とも云ふ。山門と云ふ時の山門は何々山、例せば巨福山とか大雄山とか云ふ略言。三門と云ふ時の三門は、左右に二箇の小入口と中央に一箇の大入口がある、その三を空、無相、無作に擬したものを云ふ。三門と云ふも山門と云ふも異名同體。——寢堂、「今日で云ふ寢室。

——方丈、「毘耶離城中にありし維摩居士の居室を云ふ。何故に維摩居士の居室を方丈と云ふかと問へば、答は左の如くである。』唐の王玄策が印度に行き、維摩の居室を測量した處、僅に一丈四方でありし、と云ふによる。——其の方丈を今は二

つに分け、大方丈、小方丈と云ふ。大方丈は佛間、客間。小方丈は住持職の居間。——井上君は云ふ、「今日は方丈の大小に拘はらず方丈と云ふが如く、住持職もその人の賢愚に拘はらず方丈様と稱す。」と。如何にも御説の通りである。——辨得、「眞偽を點檢すること。——許、爾、「文字の如く、君に任す、思ふ様にやりなさい。——

提講。

敢へて活眼を開いて見るまでもなく、天地間にある一切の事々物々、是と定むべきなく、非と定むべきなし。善とも惡とも正とも邪とも定むることは出来ぬ。それが眞理であり、それが

大道である。然るに此の道理を知らざる人は、是にあらざるを是とし、非にあらざるを非とし、これは迷ひ、あれは悟り、又は、苦である樂である、暑である寒である、と自己自身で無理無體に窮窟の思ひをなして居るは實にお氣の毒千萬。——試みに是非、善惡、得失、邪正、迷悟等を一切放下し、一切忘却して見よ。心身共に輕安になる。——心身共に輕安になりし處を淨躰々、赤灑々と云ふ。如何にして心身共に輕安、淨躰々、赤灑々になり得るか、と問はば、云ふもおそいが見性悟道。「見性悟道とは大死一番することである。大死一番して再生せざれば、如何に善なりと思ひしことも善にあらざる、如何に正しきと思

ひしことも正しきにあらず。悉く不善であり不正である。一死再生し來れば、總てが最善となり、最正となる。茲に到れば、紅塵に居して、紅塵に染まず、妄想に住して、妄想に惱まず、處々眞處々眞。求めずして淨躰々となり、願はずして、赤灑々となる。

且道、面前背後是箇什麼、』是非を去り得失を忘すと雖も、面前は面前、背後は背後。——背後を以て面前となす能はず、

面前を以て背後となす能はず。茲に一衲僧あり、出で來つて、「面前は御覽の通り佛殿と三門、（面前は相海でもよし、）背後は御存知の如く寢室と方丈。（背後は駿山でもよし。）」と云はれたとせん。それがそのまま、我ものになれば、別段に是非得失等

を放下し忘却して淨躰々赤灑々になる必用はない。』此の衲僧は具眼者か不具眼者か。幸に諸君の眼力で辨じ得ることが出来たならば、爾に許す親しく古人の維摩を見ることを。—— 面前はこれく、背後はこれく、と云ひつゝ出て來つた衲僧の心底を辨檢することが出来ねば、無論、古人維摩居士の心底は知れぬぞ、と云ふ意味が自然に潜在して居ることと思ふべし。垂示は是れで終了とし、本則に移ります。

◎本則

舉、維摩詰問文殊師利、何等是菩薩入不二法門、文殊曰、如我意者、於一切法、無言無說、無示無識、離諸問答、是

爲入不二法門、』於是文殊師利、問維摩詰、我等各自說己、仁者當說何等是菩薩入不二法門、』雪竇云、維摩道什麼、復云、勘破了也、』

讀方

舉す。維摩詰、文殊師利に問ふ、「何等か是れ菩薩の入不二の法門なるぞ。」文殊云く、「我が意の如くんば、一切の法に於て無言無說、無示無識、諸の問答を離るゝ。これを入不二の法門となすなり。」こゝに於て、文殊師利、維摩詰に問ふ、「我等各自己に説きをはれり。仁者當に説くべし。何等か是れ菩薩の入不二の法門なるぞ。」雪竇云く、「維摩、什麼と道ひしや。」

復た云く、「勘破し了れり。」

字解、分解。

維摩詰、』具さには維摩羅詰と云ふべきである。今は略して維摩又は維摩詰と云ふ。』維摩詰は天竺の毘耶離國の人、五百長者の隨一、身は在家の居士でありながら大乘佛法の眞髓を掌握し、見識高邁、機鋒縱横、實に驚くべく敬すべき居士中の大居士である。明の王世貞が維摩經を見て云く、「維摩は文の鬼神なるもの。變幻出没得て端倪すべからず。」と。又、宋の張元覺は非常な佛教嫌ひ、寺塔伽藍の立派なるを見て憤慨し、無佛論を著し以て佛教を攻撃せんとせし、其の時、細君に「佛がなければ

今更無佛論を著はすに及びますまい。」と云はれたので、成程と思ひ一時無佛論を中止。後に維摩經を讀んで大いに感心した。細君、「無佛論はどうなされました。」と問うたので、張元覺、頗る閉口したと云ふ。』——維摩詰は、常に小乗佛法に執着して居る羅漢たちを手當り次第に叱りつけ、大乘佛法に誘引してをられた。或時、釋尊のお説法の席に維摩が見えぬ。釋尊、弟子に向つて、「なぜ今日は維摩が見えぬか。」とお尋ねになると、弟子云く、「彼れは病氣で引込んでをります。」それをお聞きになつて、「然らば誰ぞ病氣見舞に往け。」と仰せになつたので、第一に舍利弗尊者が往くことになつた。ところが舍利弗は曾て坐禪

のことに就き、眼の玉の飛び出るほど叱られたことがある。故に、「私は御免を蒙りたい。」——然らば目蓮尊者。目蓮尊者も維摩のために曾て詰責されたことがある。故に往くとは云はぬ。かゝる理由で、誰も彼も皆維摩を怖ろしがつて、一人として往くと云ふ者がありません。そこで不得止、文殊師利が往くことになりました。愈々文殊師利が往くと云ふことになる、昔も今も同じことで、先に往くことを辭した尊者たちが、「文殊師利が往かるゝなら定めて意外の問答商量があるであらう。我も往かう、我も往かう。」と菩薩やら羅漢やら雲霞の如く押しよせた。それらの一切を引きつれ、文殊師利が維摩居士の病氣見

舞。——その見舞の問答の中に入不二法が出た。其の入不二法が本則となつたのである。

文殊師利、妙吉祥と譯す。七佛の師とも又は三世諸佛の母とも云ふ。此の人、實際にあつた様にも思はれ、理想にして實際は無き様にも思はれます。委細のことは學者の研究にまかせ、こゝでは實際にあつたとしておきます。

不二法門、差別門から云へば、大小、長短、深淺、高低、善惡、是非、迷悟、得失、苦樂、等々無量無數無邊無際である。平等門から云へば、大小、長短、方圓、彼我、尊卑、知愚、醜美、等々本來一物なし空々虚々である。されど差別萬象の外に

平等一如なし。一如平等の外に差別萬象なし。猶水の外に波なく、波の外に水なきが如し。——かゝる道理に闇き人は、差別の一方に着して平等を閑却し、平等の一方に着して差別を放下す。故に平和が破壊となり、泰平が動亂となり、家庭も國家も常に恒に修羅道、餓鬼道、畜生道の共同生活となる。——由來、平等即差別、差別即平等、それが天然の道理にして自然の法則である。此の天然の道理、自然の法則に歸源することを不二法門と云ふ。

無言無説、』言語道斷の意。——無示無識、』心行所滅の心。

我等各自説己、』維摩經の本文を見ると不二法問品に、文

殊師利を入れて三十二人の菩薩が不二法につき各自、思ひ思ひの意見を吐露し、最後は文殊師利。故に我等各自説己、サア是れから居士の番だ、と云ふのである。——仁者、』維摩をさしての尊稱。普通にアナタと云ふほどのこと。——勘破了、』調はずみ、——見とゞけた、——様子はわかつた。——

提講。

此の本則は維摩經の一節の其の又一部。文殊師利が佛の命令を受け五百人の弟子、八千人の菩薩、其の他數知れぬ人々を隨へ俄に問疾に來らるゝことを、維摩居士、早くも感づき、殊更に家族や看護人を却け、床の飾は無論のこと、藥瓶も檢温器も

一切かたづけ、方丈の病室を空にし、たゞ獨りベットに臥し、文殊師利の一行を待つてをらるゝと、文殊は方丈の空室に入り、其の空なるを見て問答がはじまりました。其の主なるものを掲げれば左の如し。

現疾の六論と空室の五件。—— 現疾の六論とは、

- 一、是疾何所因起、
- 二、其生久如、
- 三、當云何滅、
- 四、所疾爲何等相、
- 五、云何慰諭有疾菩薩、

六、云何調伏其心。——

空室の五事とは、

- 一、此室何以空、
 - 二、無侍者、
 - 三、舍利弗見此室中無有牀坐作是念、斯諸菩薩大弟子當於何坐、
 - 四、普現色身問維摩詰、居士父母妻子親戚眷屬吏民知識悉爲是誰、奴婢僮僕象馬車乘皆何所在、
 - 五、舍利弗心念、日時欲至、此諸菩薩當於食何、以上。
- 此の問答が終ると、維摩居士が三十一人の菩薩に向ひ一々入

不二法を問はれた。其の最後が文殊師利である。」

我が意の如きは、『錯、我が意の如きとは文殊師利としては如何にも手ぬるい。圓悟下語して曰く、什麼と道ふぞ。我が意とは何ごとぞ。どこに我がある。どこに意がある。流石の文殊師利も維摩に一撓されて、直に得たり分疏不下、不見識のことである、と。如何にも御説、尤もである。——一切の法に於て、一切の法とは何を指して云ふ。由來大地寸土なし。古人云く、了々として見るに一物なし。圓悟は、什麼を喚んで一切の法と作す、と下言して居る。——無言無説、』無言無説と云ふだけ有言有説。所謂云ふに落ちずして語るに落つるとは此の事。

——又添ふ、無示無識、』一言既に出づれば駟馬も逐ひがたし。大切の白圭にきずをつけた。聞く、文殊は大智人と。大智人どころか大愚人。更に駄口を弄して、諸の問答を離る、と云ふに至つては別人を瞞すること甚しと云ふべし。』されど諸佛の師たる文殊師利のことであるから、眼、東南を見て其意、西北にあるならん。軽々に臭口を開くと心肝を見らるゝ。——是、を入不二法門となす、』是れで文殊師利の答案は終結。』衲、思ふ、文殊師利が入不二法門につき、以上の如く極めて薄弱なる應答をなされた所以は、或は維摩居士に花をもたせんが爲に一歩譲りて斯くなされたのではなからうか。——然らざれば如

何にも文殊師利としては亂葛藤、粕妄想である。——それはそれとして、只今までは維摩居士が攻撃者で、文殊師利が受手であつた。處が主客轉換、急に文殊師利が攻撃者となり、維摩居士が受手となつた。是に於て文殊師利、「我等各自説已、仁者當に説くべし。何等か是れ菩薩の入不二法門。」と弓を満月の如くにして維摩詰に向つた。維摩詰、サア此矢面に立つて何と答へたであらう。圓悟禪師は茲に下言して、箭に中るは人を射る時に似たり、と云うてゐる。可謂、好言語と。維摩詰は維摩詰として修禪の學者。維摩詰に代つて一句道唱し來れ。——流石、雪竇禪師だ。維摩詰の默然を云はずして、維摩什麼と道ひ

いぞ、と學者に向つて一箭を放たれた。圓悟禪師、萬箭、心に攢る、と下言してゐる。圓悟と雪竇は同穴の狐だ。諸君、眉つばものだぞ。油斷をすると鼻毛を抜かるゝ。——復曰く、勘破了也。是れは維摩詰が三十二の菩薩を勘破したと云ふことか、將亦、雪竇が維摩詰を勘破したと云ふことか。——勘破了。了、文殊師利も維摩詰も、雪竇も圓悟も勘破了。——之是を、入不二法門と云ふも亦可ならずや。

◎頌

咄、這維摩老、悲生空懊惱、臥疾毘耶離、全身太枯橋、七
佛祖師來、一室且頻掃、請問不二門、當時便靠倒、不靠倒、

讀方

咄、この維摩老、生を悲しんで空しく懊惱し、疾に毘耶離に臥し、全身ただ枯橋せり。七佛の祖師來りぬ、一室且に頻りに掃ひ、不二門を請問し、當時便ち靠倒したり。靠倒せず、金毛の獅子も討ぬるに處なし。」

字解、分解。

悲生、」是は維摩經、問疾品に、菩薩爲衆生故、入生死有生、死則有疾云々、に依る。云く、自分は衆生濟度のために此の世に生れたのである。——懊惱、」煩悶、苦惱のこと。——毘

耶離、」維摩居士の住處、都市の名。——七佛、」毘婆尸佛、

尸棄佛、毘沙浮佛、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛、釋迦佛。

——一室且頻掃、」此の句は、維摩經の中の、「空其室內、除去所有及諸侍者、唯置一床以疾而臥云々」の問疾品の意を取つたのである。——靠倒、」だしぬけを喰うて聊か驚愕した様子。

——金毛獅子、」是は文殊師利を云ふ。——無處討、」其の

消息、所謂維摩詰の胸中、トンと忖度することが出來ぬ。——

提講。

咄、這維摩老、悲生空懊惱、」ヤイコラ、聊かでも修行した者が此の世に生れて來たことを悲觀し、大煩惱を起し、病氣にか

り全身やせこけ、まるで骨と皮、餓鬼にひとしき其のさま、お氣の毒と云ひたいが、お氣の毒と云ふ言葉も出ない、』と齋頭第一にコキおろした處は雪竇禪師の活作略。——流石は老維摩だ。一切衆生の四苦八苦をしてをる。その様を見て、如何にして是を濟度せんものかと、百慮千考、それがために疾をされた。其の慈悲心は實に見上げたもの、と云ふ意味が咄の裏に含蓄してをることを忘れてはならぬ。』——君子は千里同風。釋迦如來は維摩詰の胸中を洞觀し、七佛の師たる文殊師利を見舞にし向けられた。それを洞觀した維摩詰は一室且頻掃で、維摩經にある如く何もかも一切掃ひ掃うた其の様子は白隱の所謂、長

空を一掃して、點埃を絶する底である。』大智の文殊と理窟屋の維摩であるから、文殊も病氣見舞のことを忘れ、維摩も病氣のことを忘れ、無論、話柄は入不二法門となつた。如何に維摩が屁理窟を云うても、彼は病人だ、熱に侵されて箸にも棒にもかゝらぬ事を云ふ、と除外しておけば泰平であつた。然るに文殊、自己の智恵が却つて邪魔になり、各自答へ終りました、仁者如何、と維摩詰に向つて鎗頭を衝き出した。——茲に於て雪竇禪師、維摩詰が疾に臥して居るから、文殊の鎗頭に突き倒さるゝは必定と思つた。處が疾床に臥すと雖も、疾氣が疾氣だ、普通一般の疾氣に非ず。衆生の爲の疾氣であるから、衆生の爲と

409
107

あれば健康者も及ばざる大勇氣が出た。其の大勇氣を見て、雪
寶禪師、安心。故に云ふ、維摩詰、文殊の問鎗に靠倒かたするかと心
配したが、老練家のお爺、ヒラリと身をかはし一黙を以て受け
流した。嗚呼よかつた、靠倒せず。——最後に金毛獅子云々
と云うて初めの咄をとり消し、維摩詰を賞讃した。』——文殊
師利の大智と雖も、維摩の一黙、其の消息を窺ふことは出来ぬ。
——果して窺ふことが出来ぬか。出来る出来ぬは古人にまか
せず、人々修行して自知すべき處。衲は一切、黙。——

(昭和十五年五月十一日講演)

昭和十五年十一月十二日印刷
昭和十五年十一月十九日發行

著者
發行所
兼
兼

佐々木 四郎

東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井總元方内

發行所
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井總元方企畫部

終

